書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

現代意訳　大般涅槃経

原田霊道

書肆心水

SAMPLE
Shosi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目次　現代意訳　大般涅槃経

解説　17

大般涅槃経

第一　釈尊の滅入〈序品〉　38
生類の悲しみ　38
最後の供養　41

第二　最後の供養者純陀〈純陀品〉　46
二つの果報　46
生ずる者は必ず滅ぶ　49
生類のための入滅　53

第三　歎くなかれ仏陀は不滅なり〈哀歎品〉　56
甘露の正道を指示す　56

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

認識の誤謬　58

第四　仏陀の永恒性〈長寿品〉　64
一切生類のために　64
平等の慈悲　66

第五　仏陀の確実性〈金剛身品〉　71
仏身の常住　71
僧の三の種類　73

第六　経題とその内容〈名字功徳品〉　75

第七　涅槃とは何ぞや〈四相品〉　78
正法の宣揚　78
戒律の制定　80
涅槃に対する謬見　82
常住の意義　84
小乗の解脱と大乗の解脱　87

第八　依憑の標準〈四依品〉　91

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

四依とは何ぞ　91
破戒と信仰　93
第九　正邪の甄別〈邪正品〉〈四諦品〉　96
破法の魔　96
四種の真理　97
第十　万有の本体〈如来性品〉　99
仏　性　99
三宝の一体　102
理解より体現へ　104
第十一　我と無我と仏性〈文字品〉〈鳥喩品〉〈月喩品〉　107
無我と真我　107
仏性と月　109
第十二　涅槃経と菩提心〈菩薩品〉　112
信じて行なえ　112
生類教化の手段　114
仏は生類の父母　116

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第十三　会衆の質疑〈一切大衆所問品〉　118
別離の悲歎と慰藉　118
一闡提と救済　121
飲食と病　123
第十四　釈尊の疾病〈現病品〉　127
迦葉の歎願　127
仏身は真の健全体　129
第十五　聖者の学行〈聖行品〉　132
聖規の厳守（戒行）　132
真実相の理解（定行）　135
真理の探究（慧行）　137
大乗の愛欲観　139
世諦と第一義諦　141
他教の妄見を破す　143
五味の喩と捨身求法　146
第十六　純浄の行〈梵行品〉　151

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

七種の善法　151
四種の大乗心（四無量心）　153
極愛一子の心境　158
無差別平等の心地　161
仏教の道徳生活　163
六種の思念　165
阿闍世王の懺悔　169
耆婆の勧説　173
無根の信　176
仏性と嬰児〈嬰児行品〉　182

第十七　解脱道の十徳〈高貴徳王菩薩品〉　184

聞、思、修の三慧　184
体験の真理　187
涅槃と煩悩　190
闡提の成仏　192
涅槃と大涅槃　197
五種の神通　198
大慈悲と精進等の十徳　201
涅槃への道　205

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

断惑と涅槃　208
解脱と仏性　210
涅槃と信仰　214

第十八　仏性の普遍と常住〈師子吼菩薩品〉　218
仏性の体　218
十二因縁と仏性　220
修養の必要　222
聖者の見性法　225
眼見と聞見　228
仏性の実在について　231
解脱と修養　238
入滅地の選定　243
涅槃顕現の三相　248
修養の力　250
修養の必要　254

第十九　涅槃の風光〈迦葉菩薩品〉　260
仏の子善星　260
教説の矛盾について　262

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

信根の復活　266
修養の進程　271
生類の修善について　277
涅槃経の体現　281
第三　外教徒の入団〈憍陳如品〉　286
外教徒の謀議　286
涅槃の否定者　288
修道に対する謬見　293
最後の入団者　297

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

復刻版凡例

一、本書は原田霊道著『大般涅槃経』（一九二二年、仏教経典叢書刊行会）の復刻版である。新しく版を組むにあたって左記のように表記を現代化した。

一、新漢字（原則標準字体）、新仮名遣いで表記した。

一、送り仮名と句読点を現代風に加減した。

一、踊り字は「々」のみを使用した。

一、現今平仮名表記のほうが一般的なものを平仮名表記に置き換えた。

一、読み仮名ルビを補ったり省いたりしたところがある。諦か（つまびらか・あきらか）在す（います・ましまず）傷る（やぶる・きずつける）のように何通りか読みがありうるものには読み仮名ルビはつけていない。

一、本文節見出しの節番号は省いた。

一、本書刊行所による注記は〔　〕で示した。

一、正誤を判断しかねる箇所などに「ママ」のルビを附した。

一、「仏陁」は「仏陀」に、「純陁」は「純陀」に置き換えて表記統一し、伴って他の「だ」と読まれるべき「陁」も「陀」に置き換えて表記統一した。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

現代意訳　大般涅槃経

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、涅槃経は多くの大乗経典が、云わんとして云い能わなかった一切生類悉皆成仏の旨を明らかにして、総ての大乗経典に理論的根拠を与えた経典である。従ってその中には種々の問題が取扱われてあるが、中心は「仏性の普遍」と「仏身の常住」との思想である。故にこれに関する概念を得るために、解説の下に、中心思想に関聯する二、三の事項を述べることにした。

一、本書は三十六巻二十五品の「南本涅槃経」に拠って、本経の結構そのままに、各章品から根本の思想に直接する処のみを抄訳した。元来、本経は漸次に発達し来たった涅槃文学を網羅して、それを組織大成した三万六千言と云わるる浩瀚なものであるから、到底、本書の如き小冊に尽さるべくもない。故に重要の章品のみを抄訳せんかとも思ったが、各章品に、蒐集された材料、発達の跡の見るべきものがあるので、これ等の事項を顧慮しつつ全章に亘ることにした。

一、「後分涅槃経」は釈尊の入滅および滅後の事を叙べて、未完の本経を補う処があるので、巻末に附加すべきを、止むなく割愛したことを遺憾に思う。

一、極めて大胆な抄訳をなした上に、訳語も甚だ蕪雑で、ただ徒に聖典の尊厳を冒瀆するのみに終ったことを、衷心から慚愧している。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本書について文学博士椎尾弁匡先生が種々御指導下さったことを謹んで感謝する。

大正十一年十月

原田霊道識

SAMPLE
Shoshi-Shinsui. com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

解説

一

涅槃経は、釈尊の最後説法の形式を以て、仏陀の何たるかを叙述した経典である。即ち入滅を首題として、仏教の最高理想である仏陀の境地、即ち涅槃の内容を闡明するものである。

釈尊の五十年の伝道生活は最も力強く釈尊の仏陀たることを語るもので、教徒は何等の説明を待つことなしに、仏陀の実在とその永遠の生命とを信じて疑わなかった。然るに今や入滅の時に臨んで、釈尊自身には最も有意義に過ごし得た生涯の行蹟に対して、無限の感謝と喜びを覚えるのみで、死は何等意とする処ではなかった。唯だ静かに安らかに時の流れのみが移り行くのであった。しかし常住たるべき仏陀の死滅を眼前に見ては教徒たるものは誰でも、永別の悲歎と共に、「老病死を脱して不死永生を得た」と常に宣言された教説に不審を抱いて、その信仰に動揺を覚ゆることであろう。この人情の機微に

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

逗(とう)じて、真に仏陀の永遠不滅なることを知らしめ、そして不動の信念を確立させようとするのが本経典開説（成立）の眼目である。すなわち釈尊が肉体の死滅を眼前に、しかも仏陀の真生命は、永劫に全生類の中に生きて、滅することがないと説かるる最後の大獅子吼が本経典である。故に本経典は釈尊最後の教説として一代の教説を約説するものとせらるる。

元来、釈尊の般涅槃(はつねはん)（Parinibbuta）即ち仏陀の生活は三十五歳の正覚成就(さとりをひらいた)の際に始まるもので、入滅に際する新しい問題ではない。しかし涅槃の境地を表現するには仏陀入滅の事実を中心とする時、最もよく仏身の常住なることを徹底せしめることが出来る。本経に限らず大乗の経典は皆釈尊の生涯における或る事項を中心として、仏陀の内容の全体を表現せんとするものである。即ち「華厳経」は釈尊の成道を中心とし、「法華経」は説法教化を首題とし、「浄土経」は救済慈悲を中心としている。本経もまた、この大乗経典成立の本義に基いて、釈尊の入滅を中心として、仏陀の内容を観察せんとするものである。

本経はかくの如く釈尊の常恒不滅なることを現さんとするにあれば、その一貫せる思想は法身の常住と仏性の普遍とである。この如来常住、仏性普遍の妙義こそ涅槃の実在を語るもので、この間に仏教の最高理想の涅槃の風光は看取せらるる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

二

釈尊の入滅を首題とする経典、所謂涅槃部に属せらるる経典の支那に翻訳せられた最初は、後漢の頃、支婁迦讖（西紀一四七―一八六）が「胡般泥洹経」を訳出した時である。次いで魏の安法賢（二二〇―二六五）、呉の支謙（二二三―二五三）など訳出する所があったが、これ等は現在伝わっていない。経典の目録に依れば、この他になお二十余種を数え得るが、現に存するものは左の十一種である。

小乗涅槃経――小乗教意に立脚せるもの

一、仏般泥洹経　二巻（西晋）　白法祖
二、大般涅槃経　三巻（東晋）　法顕
三、般泥洹経　二巻　訳者不明
四、遊行経　一巻（姚秦）　仏陀耶舎、竺仏念
五、仏遺教経　一巻（姚秦）　鳩摩羅什

大乗涅槃経――大乗教意に立脚せるもの

六、方等般泥洹経　二巻（西晋）　竺法護
七、大般泥洹経　六巻（東晋）　法顕、覚賢

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

八、大般涅槃経　四十巻（北涼）　曇無讖
九、四童子三昧経　三巻（隋）　闍那崛多
十、大悲経　五巻（斉）　那連提耶舎、法智
十一、大般涅槃経後分　二巻（唐）　若那跋陀羅、会寧

右の中、「一」「二」「三」は「四」の異訳、「六」は「九」の同本異訳とせらるる。「八」の曇無讖（どんむしん）の訳本が最も重要なもので、全訳に近く、「七」の法顕等の訳本はその初めの十七章を訳出せるもの、「十一」の会寧等の訳本はその残欠を補えるものとされてある。

法顕の訳本は「六巻泥洹」と称せられ、自ら全インドを周遊して得た梵本に依って、東晋義熙十三年（四一四）に覚賢と共に金陵道場寺において業を始め、翌年訳了したものである。

曇無讖（Dharmaraksa——中インドの人）の訳本はその献身的求法の熱心によって伝えられたもので、河西王蒙遜の保護の下に玄始三年（四一四）に訳を始め、前後七年を費して同十年（四二一）に了った。曇無讖はその全訳ならざるを慨いて、自らその残欠を捜索せんとして、途に蒙遜のために害せられた（齢、四十九、——北涼義和三年（四三三）。この本は「大本涅槃」と略称せらるる。曇無讖の死後、間なく南方に伝わり、訳後十年、慧観、慧厳（えごん）、謝霊運等は法顕本と対照して校訂修治を加えて、「大本涅槃」の四十巻十三章を、三十六巻二十五章とした。これが「南本涅槃」で、これに対して大本を「北本涅槃」と云う。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

「後分涅槃」はその後、二百五十年を経て、唐の会寧（かいねい）が入竺中、訶陵国（かりょうこく）の人若那跋陀羅（Jñānabhara）と共に訳出した上下二巻で、「大本涅槃」の最後憍陳如品の余と遺教品、還源品、荼毘品、廓潤品の四品より成る。

西蔵一切経においては経蔵（カンジュール）第六大部が即ち大般涅槃部 Myarg-hdas であって、両大帙に亘る彪然たる大部である。漢訳との対照は未だ精細に研究されて居らぬが、大体は両者一致する様である。

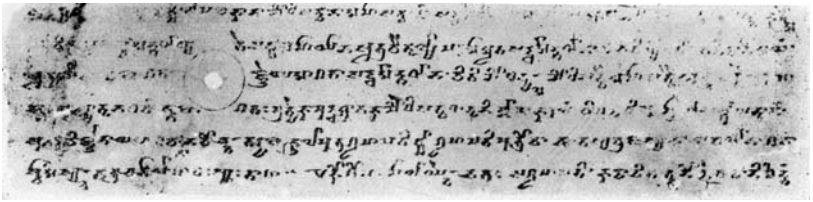
涅槃経の梵文は今逸して伝わらぬ。梵文インド先哲の著書中にも引用されて居らぬ。ために一時はその存在すら疑われた。しかし幸いにも現時この断片がようやく発見された一枚はドリトル・スタインが于闐（うてん）で発見したもので、他の一葉は日本でしかも弘法大師伝来の由緒がある珍品で、吾が高楠博士が発見されたものである。この二葉は本巻の口絵として出してある〔次ページに掲載〕。何れも支那隋已前の筆蹟である。

三

「大本涅槃」と、その修訂本である「南本涅槃」とが章品巻数の相異なるのは「六巻泥洹」に倣って大本の第一「寿命品」を序品以下の四品に分かち、第四「如来性品」を第七「四相品」以下の十品に分章したからである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

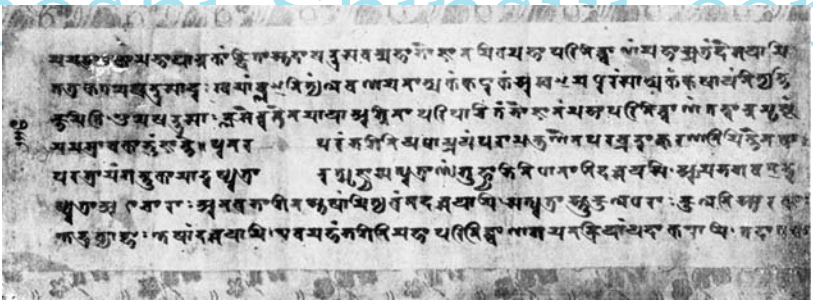
書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



スタイン氏于闐発見大涅槃涅槃経原文断見（ヘルンル氏仏典遺佚断片所載）

大涅槃経亦復如是、為於南方諸菩薩故、当広流布、降注法雨、弥満其処、正法欲滅、当至闍賓、具足無欠、潜没地中或有信者或不信者、如是大乗方等経典、甘露法味、悉没於地、是経滅已一切諸余大乗経典皆悉滅没（下略）……（曇無讖訳如来性品）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



この紙本梵文一葉は実に弘法大師の請来する所にして大涅槃経原文としては于闐発見の一葉と共に梵文学上唯一の至宝なり。高野山に秘蔵せらるる久しく人此世界無二の珍什あるを知らず、去歳帝国大学教授高楠順次郎氏高野の古文書を調査するの際これを発見せらる。真に卓功というべし。今ここに教授の寛大なる聴許を得て原文半部を初めて世に公にするは、編者の光栄とする所なり。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

この経典の梗概については、各章の題目、およびその下の分節によって、その概要を知り得るよういささか意を用いたから、それに譲ってここには繁を避けて各章の梗概は差し控える。本経全体の分科については早くインドにおいて世親によってなされた七分科に端を発して、支那においては本経講学の隆盛と共に、河西の道朗（東晋の人）、智蔵（四五八―五二二）、曇済（四一一―四七五）僧亮など十余家が各々独自の見識を以て、種々の分段を試みて経意の闡明に尽されたが、章安尊者灌頂（五六一―六六二）の五分科が最も要領を得ているように思わるるから、それに依って一経を概観することにしよう。

灌頂は一経二十五品を五段に分けた。即ち第一段は本経の開説のために十方の聖者を始め、僧俗、鬼神、鳥獣、虫魚に至るまで、宇宙の万有万霊が娑羅林に集い来ることを明らかにする序品である。本書の第一「釈尊の入滅」はこれに当る。

第二段は第二「純陀品」より第十七「大衆所問品」に至る十六章を一括し、広く涅槃の内容を説くものとせらるる。これ「六巻泥洹」の第二章以下を総て摂めるので、大乗涅槃の説かんとする理想の概要はほとんど尽されてある。本書の第二「最後の供養者純陀」より第十三「大衆の質疑」までは、この段落の抄訳である。

第三段は涅槃を体現する即ち最高の理想に到達する方法、即ち解脱道を明らかにせる所、ここに病行、聖行、梵行、天行、嬰児行の五行と、その十種の力用とが述べられてある。経の第十八「現病品」より、第二十二「高貴徳王品」に至る五品、本書の第十四「釈尊の疾病」より第十七「解脱道の十徳」

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

まではこれに属する。

第四段は仏性の常住と普遍とを更に縦論横説して、涅槃の意義を闡明する所で第二十三「獅子吼品」がそれである。本書の第十八「仏性の普遍と常住」がこれに当る。

第五段は第二十四「迦葉菩薩品」と第二十五「憍陳如品」との二品を充つるので、ここには涅槃の風光、無礙自在の力用が説かれてある。本書の第十九「涅槃の風光」と第二十「外教徒の入団」とは正しくそれである。

「後分涅槃経」は本書に収むることが出来なかったが、この経には本経「憍陳如品」の残余と釈尊の遺訓、入滅の状況、滅後火葬の事情その他を叙してある。説相が甚しく小乗涅槃に類する所から、義浄（六三五―七一三）の如きこれを大乗に属するを非とするものもあるが、中に法身常住と云い、二乗の知る所でないと云うが如き文勢から見て、「大乗涅槃経」の残欠を補うものであろう。

四

本経の中心思想はその名の示す如く涅槃そのものである。従ってこれを根底とし本体とする法身、如来、および法身、如来の隠れたる相である仏性はまた本経の主要問題である。故にこれ等の事項に関する大要を予め説明しおくことは、本文の理解を容易ならしむるに幾分の資助とならんかと、以下これに

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ついて少しく述べることにしよう。

涅槃とはまた、泥洹（ないおん）とも云い、梵語 nirvāṇa, nibbāna の音訳で、滅度、円寂、寂滅、解脱などと訳されているが、元来、涅槃は本経所説の義理をことごとく包含するを要するから、適当の訳語はないと云わねばならぬ。本経が支那に訳された当初に、これを訳するの可否について争われた所以はここにある。正確の訳語ではないがこれ等が涅槃の何物なるかを髣髴させることは出来る。涅槃とは一般に理解されている所は、滅の意味で、吹き消す（nirva）の語から来たと云われている。釈尊も涅槃とは「貪瞋痴の滅なり」、「無明の滅なり」としばしば説明されているが、これは涅槃の消極的方面で、涅槃の全部ではない。涅槃の消極的方面は確かに無明煩悩の断尽した当体であるが、煩悩我執の滅尽すると同時に、新しい積極的の力、新しい活動力の賦与さるることは拒むことの出来ぬ事実である。本経の明らかにせんとする所はこの積極的方面である。涅槃の属性として吾人の最高理想の常楽我浄を説かるる如き、全くそれである。積極的活動を闡明せんとするも、その積極力は絶対的のものであるから、積極的に言い表わすことが出来ぬ。従って止むなく消極的否定法によってその絶対なること現わしつつその積極的方面を明かさねばならないのである。これ本経が積極的方面を闡明することを眼目としながら、形式の上に偉大な表現を見ない所以である。離言絶対のものを表わすには否定的表現法を用いるの外はない。故にそこに現された涅槃の実性なるものは極めて消極的であるが、この経典に依ってもたらさるる信仰には実に偉大なものがある。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

かく涅槃の語は一般に考えるが如き消極的の意味のみでなく、むしろその否定は更に大なる力を肯定せんがための否定で、否定が涅槃の本義ではない。涅槃の語が単に「吹き消す」の意味ばかりでなく、最高の存在を表わすものであると云うことは、単に大乗涅槃経においてのみ説く処でなく、原始仏教の研究によって仏陀時代にも涅槃を絶対安穏、最高楽、清涼など云われたことが明らかにされてある。

この涅槃は迷妄我執の滅尽の当体と云うも、本来常住のもので、智に因って作らるるものでなく、原因の結果としてでもない。所謂因果を超越した絶対常恒の存在である。修道によって常楽我浄の四徳が現わるると云うも、そは万有に対する価値観の顚倒を滅尽して、万有の真相を究明した時に現わるる、本有の存在である。小乗教は外道の有我論に反対するために無常、苦、空、無我を仏教の正義として、涅槃は我執我欲を絶滅した状態であると説いているが、この説は仏教の本義ではない。無我と云い、空と云うは真実義を開顕する一過程で、釈尊の真意は万有否定の上に現わるる、真実相を知らしむるにあった。小乗教徒はその真意に徹せず、却って無我、無常、空を固執するに至った。この妄見を打破して実我実在を説くのが大乗の涅槃説である。故に常楽我浄と云うも、外道のそれとは全然異なるもので、相対的の無我、我、無常、常、空、不空等を超越した絶対の常、楽、我、浄である。絶対は離言のものであるが、しばらく名を立てて大我、大常、大楽、大浄と云う。大は絶対を表わすのである。本経は積極的方面を力説するもそれが離言絶対であることを現わすに多大の努力を費して居る。非有非無、非常非無常、非楽非苦などを繰り返すは全く相対的観察を排斥するものである。故に我執、我欲を滅尽した

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

当体の積極力と云うも、その滅尽の上に現わるると、その間に因果的関係を認むるは、真に涅槃の妙境に徹するものでない。

かく吾人の認識し思慮するものはたとい無我、空、無常を超越する常、我、浄、楽と云うもすでに相対的なるを免れない。実に涅槃の境は認識の世界でなく、体験の境である。故に本経には一の説明を終る毎に二乗の知る処でない、凡人のうかがう処でない、ただ聖者の体験を待つのみと繰り返してある。

五

涅槃は我執我欲の束縛を脱した当体の積極的方面であるから、解脱とも訳された程で、解脱は涅槃の一面を語るものである。故にしばしば解脱なる言葉で涅槃が説明されてある。涅槃は確かに束縛の打破、輪廻の解脱であるが、そは消極的方面で真に涅槃の何ものたるかを明らかにするものでない。故に本経には解脱を説くに慧解脱、心解脱、讃嘆解脱と説いて、その単なる束縛の打破でないことを表わしてある。慧解脱とは智的解脱で、真実智によって無我、無常の何たるかを解すること、心解脱は情意生活の解脱即ち無我の実際生活を行うことである。讃嘆解脱とは前の二解脱を完うせる境地、即ち智的と情意生活との完全な解脱である。その実際的行為が真理に相応して正しくても、その真理に相応する所以を知らなければ心解脱は完うするも慧解脱ではない。これに反して無常、無我の何なるかを知るも、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

無我の実際生活をなし能わぬものは慧解脱と云い得るも、心解脱とは云われない。この両者を倶に解脱して教化の大用を現わすのが讃嘆解脱である。かくひとしく解脱と云うもその内容に浅深精粗がある。故に解脱を倶解脱の意味に体解する時、始めて解脱が涅槃の真義に契うものである。

経には大乗の解脱と小乗の解脱とを挙げて、小乗教においてはこの肉体をも否定（解脱）すべしと云うも、我が大乗の涅槃には肉体の存在を認むると説いてある。これ大乗の解脱が断滅論でないことを明かすもので、肉体の存否は問題でない。小乗教にあっては涅槃に有余涅槃――一切の繋縛を脱するも現身の残り居るものと、無余涅槃――その肉体も死滅に帰したものとを分けて、無余涅槃を主張するも、大乗教には肉体の存否は問題でないから、もしこの解脱の二形式を認むるとすれば有余涅槃を重んずるものである。

積極的仏陀観を力説する本経は法身常住説に外ならぬ。これ本経の標幟として法身の常住を挙げる所以である。法身常住とは真理の体現者の常住なることで、釈尊の肉体はたとい提跋河畔の煙と化するも、真理の体現者としての釈尊は永劫に変化することのない常住体である。故に釈尊の出世、入滅は敢えて問う処でない。これ本経に釈尊の生涯の行蹟を化現として取扱う所以である。本経に法身を説くに五分法身を挙げて、戒、定、慧、解脱、解脱智見を説くは、全く仏陀を真理の体現者としてその常住を明したものである。五分法身とは戒定慧の三学を修して一切の迷妄を脱却する慧解脱と心解脱とを完全する自覚覚他円満の法身である。前に述べた倶解脱は正しくこの解脱智見である。この五分成就の力、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

自覚覚他の活動、迷妄否定の上に現わるる積極的本有の力の存続は無限に拡大され、向上して滅することはない。これを法身の常住と云う。

真理の体現者としての釈尊の常住は、やがてまた道を求めて止まざる吾人の常住である。自ら道を求めて真理に相応する時、そこに永遠の生命、涅槃永生は得らるる。彼の法身の常住を遺法の文句に求め、或いは宇宙の真理を法身と説くが如きは、未だ釈尊の真意に徹しないものである。

法身とは真理の体現者を表わすものであるが、真理を体現するとは、宇宙万有の如実の相（すがた）を体認することである。この意味で仏陀を如来とも云う。即ち本来常住の万有如実の相（すがた）を覚証（さと）り、その活動がことごとく真理即ち如実相に相応することを、現わして如来と云うのである。故に釈尊は常に「十二因縁を見る者は即ち万有の真実相を見る、万有の真実相を見る者は即ち仏陀を見る」と説かれた（本書二二二頁参照）。万有に一定の本質相状のないように、如来にもこれぞ如来の本質、これぞ如来の相（すがた）として執すべきものはない。本経に積極的説明をなす時、必ず、「それに執わるべきでない」と、繰り返えされてあるのはそのためである。一定の本質相状の執すべきものがあれば、それは仏陀でなく、如来でない。本文（二四七頁）に「無住無辺の存在、これが仏陀であり、大涅槃である」と。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

六

法身の隠れたる相（すがた）が仏性である。未だ仏身として現われない所が仏性で、仏性が迷妄の雲を払って現われたのが仏身であり、それを証悟の結果として論ずるのが涅槃である。故に仏性は宇宙の実性本体に名づけたもので、万有発現の根本原理、第一原因とも云うべきものである。従って万有は一の例外もなくことごとくが仏性を具えていると云わねばならぬ。即ち仏性は普遍である。真理に相応する隠れたる力、道を求むる心の徳、即ち善悪賢愚信不信を超越した本有常住の実性を仏性と云うのであるから、仏陀と凡夫とは相（すがた）の上で迷悟の別はあるが、その本質においては同一仏性の所有者である。故に人が一切の迷妄を捨て無明を滅して万有の実相を体認する時、仏性は晃々と輝いてその本有なるを知ることが出来る。仏凡に差別を認むるが凡夫にして、仏凡の一如を認識し体験するとき仏陀と成るのである。故に仏凡の差別は迷妄に依る一往の差別で、永く別なるものでない。

この仏性普遍常住の思想は独り本経に限るものでなく、総ての大乗経のひとしく説く所であるが、最も明確にこれを中心として説いたのが本経である。されば本経は総ての大乗経典に仏凡一如、一切成仏の根拠を与えるものと云わるる。

仏性はかく時間と空間とを尽して常住、普遍の実在であるから、万有万霊一つとして仏性を具えない

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ものはない。常住不変の仏性を具うるものが、成仏を得ない道理はない。たとい信仰なきもの——闡提（せんだい）（Icchantika）もその仏性が破壊され失われたのでないから、他日信仰を具足すれば、必ず成仏すべきものである。これ本経の伝訳せらるるまで非仏説として排斥された闡提成仏の主張である。この思想は更に極言すれば、闡提が他日信仰を具えて成仏するのでなく、一切の生類は実体として、永遠の過去にすでに成仏していると云わねばならぬ。

同一仏性の所有者であるのに、修道の進程によって三乗の差別を立て涅槃に大、中、小を見るのは修道に浅深精粗あることを語るもので、涅槃そのもの、仏性そのものについて大、中、小を分けたものでない。経に「大中小の別あるも、三界を脱し、生死に住せざるにおいては同一である」と説くはこの意味を明かすものである。

本経が仏性の普遍常住を高調して、総てを仏性真実の発現なりと説くは、一面に唯一の仏力に依ってのみ理想の体現せらるる事を示すものと見ることが出来る。仏性常住にしてすでに成仏せりと説くは、一面、すでに仏陀の救済可能を主張するものと見らるる。これ本経が浄土教の原理を与うるものと云わる所以である。

本経に盛んに説いてある常、楽、我、浄とは吾人の理想を総括的に表わしたもので、この絶対的理想を取って涅槃の属性とし、そして積極的方面を示さんとするのが大乗の涅槃である。この四属性は絶対涅槃のそれであるから、相対的の常無常、浄不浄、我無我、苦楽等を超越した大常、大楽、大我、大浄

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

なることは前述の通りである。言い換えれば仏陀の理想である常恒と普遍と自主とを具備した無限の生命の欲求の実現が常楽我浄なのである。

本経は総てを仏性の発現として自己の精進努力を認めないにもかかわらず、古来より「律を扶け常を談ずる」と云われて、実際問題として戒を重んずる所以は仏凡一如即ち仏徳の絶対を生類の迷妄の中に認めて、その中に仏徳を実現せんとするがためである。また一面には、甚しく弛緩していたと想像せらるる本経成立時代の僧風を緊縮して、厳粛な道徳的生活を確立せんとする時代思潮の影響もあったろう。これ本経が他の大乗経典と異なって、放漫な大乗戒を捨てて戒規の峻厳な小乗戒を説く所以である。故に実践方面として八正道、十二因縁、四念処、三学など幾多の実践徳目が挙げてあるが、その中心は常に戒律によって厳粛な道徳生活をなさしむるにある。

七

本経の成立年代については確定し得る記録がない。しかし教理発達の歴史から見、また経典中に予言の形式で述べられてある年代から、凡その年代は推定さるる。

本経は般若系統の経典と同じく、仏陀の実性を観察するもので、彼の否定的なる如くこの経典においても涅槃を否定的に差別迷妄の断尽せる当体なることを説明しているが、なお彼経に比して常住不易の

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

法身を説き、絶対の常楽我浄を説いて甚しく積極的である。即ち般若の真空妙有の妙有を闡明するものとして現われたものであろう。殊に本経の中に戒律を高調し、陀羅尼の信仰を説く点から見て楞伽経、解深密経、勝鬘経などと同じ時代思潮に支配されていることが看取せらるる。故にこの経典はその本文中に予言の形式で現わされた。

「この経典は予が入滅して四十年後は地に隠没し……滅後五百年を過ぎて後四十年に再び世に現われて大感化を与えるであろう」と云う様に、釈尊の滅後、五百年の頃、即ち西紀一世紀頃、次第に発達し来たった涅槃文学を組織大成したものであろう。この推定はこの種類の経典の一部が後漢の頃（一四七―一八六）支婁迦讖の手にて訳出せられたことによって更に裏書きされると思う。

大小二派の各種の涅槃経を比較する時、釈尊の入滅を首題として仏陀を観察する涅槃部経典の仏陀観の発達の跡をうかがうことが出来る。即ち始めには唯現実の悲哀にのみ満つるも、次には常住の法身を遺法に求め、次には遺法の文句より進んで絶対の真理に求めたが、遂に単なる理論の考察より一転して、現実に即身に涅槃を体現することを明らかにするものが、大乗の涅槃経である。

いま本経を始めより眺めゆく時、表現の主意は大乗教意に則っているが、その叙説の材料範囲には明らかに発達の跡がうかがわれる。

インドにおける本経に関する明確な記録は世親（Vasbandhu）（五世末葉（ママ）の人）が本経の註釈として「大般涅槃経論」一巻と「涅槃経本有今無偈論」一巻を著したことである。伝訳史の上から見て後漢、三国

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の時代には全インドを始め、月支、安息西域地方に盛んに流伝せられていたことは想像されるが、その後にはインドにおいては講学の見るべきものはないようである。

支那には夙く後漢の頃、本経が訳出されたと伝えらるるが、その講学の見るべきものは曇無讖の大本涅槃の訳成りて後である。本経講学の初期において人口に膾炙される事件は羅什の門下、道生（どうしょう）（……四三四）の闡提（信不具の者）成仏の声明である。道生は法顕の訳本を見て仏性普遍の深義を達観し、そして経の玄底を闡明した偉才であるが不幸、当時の学徒の擯斥を受けた。同門の僧叡はために「喩疑」を著して長安より遥かにこれを弁明した。道生は仏性普遍を堅く信じて、「もし仏意に違わば現身に悪疫を受けよう。もし聖意に契わばこの経を講讃しつつ命を終らん」と、宣言して虎丘山に隠れた。宝林、法宝等を始めその学徳を慕い集るもの多く、その主張を盛んにして、遂に竜光派の一学派をなした。

北方に「大本涅槃」の訳出があって後、間もなく南方に伝わり、慧観等によって校訂せられてから、本経は般若経と共に支那仏学者の好んで研鑽する処となり、梁朝を中心として、教学界を風靡した。宋には宝林、慧静、曇斌等、斉には道登、僧宗等が盛んに斯学の興隆に努めた。当時の仏教を代表するの観ある有名な梁の三大法師である法雲（四六七―五二九）智蔵（四五八―五二二）、僧旻（四六七―五二七）等何れも涅槃経を本宗として、涅槃経中心の仏教とした。また仏教保護の帝王として有名な梁の武帝は自らこの経を講讃し、宝亮等に勅して「義疏」を作らしめられた。現に存する「集解」七十一巻がそれである。当代学僧の所見を知るに欠くべからざるものである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

陳、隋に及んではその講学の行われないではなかったが、多くは或いは成実論を、或いは法華経を兼ねていたために、涅槃独自の教学は次第に衰えて、遂に天台宗において、法華経と同時（同一思想）の意味の下に、研究せらるるのみ。

我が国における仏教の特色は、仏教を哲学思弁とせずに、宗教修道即ち仏陀の体験を第一とした点であるから、その学派の如何を問わず、その底流には皆涅槃経の思想が活躍して居ることを掬することが出来る。しかし特別に本経を中心として講学せられたことはない。叡山の証真（源平時代）の著した「涅槃経疏抄」四巻が我が国における唯一の本経の疏釈と云わるるによっても、伝うべきもののないことが首肯されよう。

本経の註釈として現存するものを挙ぐれば、

大涅槃経論	一巻（インド）	世親（縮刷蔵経往帙六）
涅槃経本有今無偈論	一巻（インド）	世親（同上）
涅槃経集解	七十一巻（梁）	宝亮等勅集（続蔵経九十四套二―四）
涅槃経義記	二十巻（隋）	慧遠―（同上五十五套四以下）
涅槃経遊意	一巻（隋）	古蔵―（同上五十六套二）
涅槃経疏	十五巻（隋）	灌頂―（同上五十六套四以下）
涅槃経玄義	二巻（隋）	灌頂―（同上五十六套二）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

後分涅槃経釈「三徳指帰」巻末（宋）　智円――（同上五十八套五）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

大般涅槃経

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第七　涅槃とは何ぞや〈四相品〉

正法の宣揚

釈尊は迦葉に告げらるるよう、

「仏を信ずものよ、大般涅槃を説明するには四種の方面がある。一には自正、二には正他、三には能く難問に答え、四には善く法規制定の因由を知ることである。一に自正とは邪見の基となる己の身を、盛んなる火炎の如く恐るることである。我が出家の弟子は仏陀の教説に対して次の覚悟がなくてはならぬ。『我はむしろ熾然たる火炎を抱くとも、仏陀の教説に対して、この経は悪魔の所説などとは云うまい。断じて非仏説の言はなすまい。もし人が仏、法、僧の三宝の無常を説く時は、その人は自らを欺き、他を欺くものと排斥して、たとい利刃を以て我が舌を断つとも、決して三宝の無常は語るまい』と。この経を尊崇するにもかくあらねばならぬ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

迦葉よ、正他とは受学者に正しく理解せしむることである。仏陀は求法者の資性に適合する教えを説くもので、それは幼児に食物を与うるに消化力の増大するにつれて、次第に変更すると同一である。子供が成長して歩行するようになれば、消化力も強く、母乳では不足を感ずるが如く、我が教えを聞く者も、始めは常住の説を消化し理解することが出来ない。それで予はこれ等の人に対して万有は苦なり、無常なりと説いたが、次第に研究し修養した結果、大乗のみ教えを理解し得る力を生じたれば、予はいまこの経に六味を説くのである。六味とは苦は酢味、無常は鹹味、無我は苦味、楽は酣味、我は辛味、常は淡味である。無常、無我、無楽の三味は差別世界のことである。

また人が他出する時に宝蔵の鍵は善良の子に托するが如く、予もまた死に臨んで、教説の秘奥即ち仏教の根本義を形式に捕われた偏狭な教徒に托せず、必ず大乗の心をもつ聖者に宣布を委嘱する。何となれば偏狭な教徒は予が随宜の無常の説を固執して、真実に滅することなき仏陀に死滅ありと想うから。我が教えを信ずる者よ、仏陀は常住不易なりと理解するものは、仏の常在を信じ、その中に生活するものである。

三に難問に答うるとは次の如きことである。或る人が『一銭の金も費さずして大施主となる法がありましょうか』と尋ねた時、これに答えて、少欲知足なる仏教徒または波羅門の不正物を受けない者に奴婢、僕童を施せ、また禁欲行を修する者に女色を施し、酒肉を断つ者に酒肉を施し、昼食後、食事しない者に午後食物を施し、装飾を用いない人に装身具を施すがよい。さすればその名声は天下に聞え、己

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

は毛厘も費さずして大施を成すことが出来る。これを難問に答えると云う。」

戒律の制定

時に迦葉は釈尊にもうすよう、

「世尊よ、肉食しない人は高徳な方のようですから、私は肉食者には肉を施さないがよいと思いますが、如何ですか。」

釈尊は迦葉の問を讃めて、

「そうだ、汝はよく予の意を知っている。護法の大士はそうなくてはならぬ。我が教えを信ずる者よ、予は今日より以後、我が親聞の弟子たちに肉食を禁ずる。今後、肉を施す者があっても、その肉を観て我が子の肉に対する想いをなせ。」

「仏陀は何故に肉食を禁ぜられますか。」

「肉を食するものは慈悲惻隠の根本、即ち仏性を断ずるから。先に三種の例外をゆるしたのは、弟子たちの訓練の進みに随って次第に制するからである。また十種の不浄肉（梵行品を見よ）、九種の浄肉を禁ずるも、必要に応じて次第に制するからである。総て予の制規を定むるは粗より精に、形式より精神に進めるので、要は貪る心を廃するにある。故に我が仏教の禁欲は彼奢那（ジャイナ）教の一派にある極端な禁欲主義

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

と同視してはならぬ。この形式よりも精神を尊ぶことは無反省の者にはよき口実を与うもので、心の外に表われざるより、『我は仏のみ教えのままに精神を重んじて、形式に拘泥しない』と揚言して実は内外共に乱している。予の滅後は我が教徒の中にもかかる邪見の者が多く、仏の制規を乱し、正行、威儀を破って、仏教の存立さえ危くするに至ることであろう。仏教は本来の面目として形よりも心を重んずるも、かかる弊害を矯めるために予はいま規律の厳粛を叫ぶのである。種々の争議を事とし、魚肉穀類を蓄え、貴族、富豪に阿附し、営利事業を興し、金銭財宝を貯え、娯楽に耽るが如き、仏制に背く総ての悪事を離れ、内外共に清浄な生活をなすものが、真の仏教徒、真の仏弟子である。断肉の制定もこの意に外ならぬ。

四に規律制定の因由について多くの弟子たちが尋ねるには『戒律制定の本意がかくの如くとすれば、何故に憍薩羅（コーサラ）国の波斯匿（ハシノク）王にこの本意を説かれず、或る時は深と説き、或る時は浅と説き、或いは犯とし、或いは不犯とせられしや。破戒と云い、律条と云い、戒と云う意義をお説き下さい』と。そこで予は説いて、破戒堕落とは地獄、畜生、餓鬼等の苦の世界に赴く行為をなすこと、律条とは毘尼蔵（制規集）、修多羅蔵（経典集）、阿毘曇蔵（論文集）の三蔵中にある禁制項目や、四種の重罪、十三種の僧侶の軽罪、二種の嫌疑罪、三十種の慳惜罪、九十一種の懺悔罪、四種の懺悔法等を始め総て善を破り、因縁を撥無するなど軽重一切の犯罪を禁ずることである。戒とは知足とも云い、また浄命即ち清浄の生活とも云う。犯戒の怖るべく、順理の生活の清らかに安楽なるは言うまでもないが、予が罪を犯すものの

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ある毎に律条を制定して、一時に制定せざりしは、犯戒の責を恐れて、罪を隠匿するもののあらんことを恐れてである。初めに説かなければ、堕獄の罪なるを知らずして、これを犯す者があるように考えらるるが、予は一切の生類を一子羅睺羅と思えば、我が子を誑かして地獄に堕すことがあろうか。犯罪のある毎にその者に懺悔せしめ、後来を誡むるために規律を制定する。それはあたかも国王が始めに施政の方針を声明し、後に犯罪者あるに随って漸次法律を制定し、そしてその後の犯行を誡しむと同じである。これを大乗涅槃経における説戒の因縁とする。」

涅槃に対する謬見

「迦葉よ、涅槃についてこう云う思想を抱くものがある。『仏が涅槃とはもろもろの煩悩を滅し尽した状態であると云えるは、火の滅し尽して何ものをも留めざるが如きものであろう。また仏は一切の存在を否定する処に涅槃があると云えば、涅槃は存在の否定であるのに何故、涅槃は常住不易であるか。また衣服も破れてその形を失えば物として存在しないように、煩悩の滅し尽した涅槃もそうであろう。また仏は一切の欲望を離れ尽した寂滅の状態を涅槃と云われたが、それは人の首を斬れば首のないのと同様なれば、涅槃は空にして何物もないのであろう。また仏は鉄を灼熱して椎打すれば火花と化して、散り尽して何物も留めないように、真の解脱涅槃ももろもろの物欲の泥海を渡りて、動転なき世界に至れ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ば目的達成の念さえ止めないと説かれた。果して然らば涅槃をどうして常住と云われよう』と。迦葉よ、この考え方は誤りであるから、汝は予の説明を斯く解してはならぬ。煩悩を滅し尽して一切の差別相を認めないのを存在を否定すると云ったので、火花と散り失せるとは仏はあらゆる妄染を離れて、迷界の存在でないことを意味するのである。故に仏陀は差別変化の拘束を脱した、真に常住不易の真理そのものである。即ち仏陀は宇宙の真理を師とし、これを体現せるものである。真理が永恒不滅とすれば、その体現者なる仏陀が常住不易なることは多言を要しない。真理そのものを体得せないものは、時に煩悩を滅すことあるも、再び煩悩を起しそれに染さるることがある。しかし真理を体得せる仏陀は、煩悩を滅し終って再び生ずることがない。即ち真実の寂滅、煩悩の徹底的断滅、それが仏陀であり涅槃である。」

「世尊よ、世尊の懇切な説明によって、仏陀の常住なることを了解しましたが、なお一の疑問があります。仏は『予は已に業に長く煩悩の大海を渡る』と申されたが、すでに煩悩の海を渡られし仏陀が何故に、耶輸陀羅を納れ羅睺羅を生まれましたか。」

「迦葉よ、かかる仏陀の尊厳を冒瀆するが如き考えをもってはならぬ。予は更に涅槃を詳説して、その本義を明らかにしよう。

涅槃の境地に在れば宇宙の大を総て芥子に摂めて狭しとしない。その天地は初めて生じ新しく来現するものでなく、本来自然の存在に外ならぬ。生死去来の変化の相は教化を受くるものの眼に映ずる仮り

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の相で、仏陀そのものは常住にして限りなき霊能を具えている。大涅槃に在る仏陀は限りなき霊能により、種々の世間的行動を現さるるも、それは愛欲に昵むためではない。予が羅睺羅を生むも愛欲の和合によってにあらず。予はすでに久しく大涅槃を証して、種々の霊能を現わしている。その詳細は『首楞厳経』に説いてある。予はこの世界の生類を救済せんがために、托胎、出生、修学、出家、学道、降魔、正覚などの世間的経過を示し、また成道後、教化に就いて種々の相を現わすも、予はすでに無限の過去にそれ等の総てをなし尽している。我がこの身は愛欲を離れた真理体得の法身である。唯この世に順応して、種々の相を現わすのみ。故に羅睺羅を仏の子と云ってはならぬ。」

常住の意義

「世尊よ、常住の意味をいま一度説明して下さい。仏が『灯火の滅して無に帰するが如し』と説かれた譬えから推せば、仏の入滅せられた後には何物も残らないように思われますが。」

「そんな考え方をしてはならぬ。灯器に油を満たして点火すれば、油のある間は光輝き、油が尽れば光りも滅する。煩悩の滅するは光の滅するに比すべく、光は滅するも灯器はなお存するが如く、仏陀も煩悩の汚は滅するも、法身は常に厳存する。汝は光と共に灯器も滅すると思うか。」

「いえ、倶に滅しませぬが無常とは考えます。灯器は無常の物なれば、それに比する法身もまた無常で

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

はありませぬか。」

「それは余りに穿ち過ぎた非難である。世間に器と云うが、仏陀は無上の法器である。世間の器は無常であるが、仏陀は然らず。汝が涅槃の常住なることを認むる以上は、これを体現する仏陀の常住なることに異論はあるまい。なおまた予が灯滅に譬えたのは羅漢の証る涅槃についてである。大涅槃の譬えとして灯滅を説いたことはない。」

その時、迦葉は釈尊にもうすよう、

「世尊はかつて『諸仏に秘密蔵がある』と云われましたが、私にはそう思われませぬ。仏教にはすこしの秘密もなく、広く生類全部に知らしむるが、本義ではありませんか。」

「確かに汝の云う通りで、仏陀には秘密の蔵なるものはない。仏陀は玲瓏たる秋の満月の如く澄み亘って一点の陰翳を止めない。智見の低い者が理解し得ぬのを秘密蔵と云うので、智者の前には秘密の蔵はない。そもそも秘蔵とは金銭を慳悋蓄積すること、不具を羞じて人に見せないこと、債務者が債権者を怖れて隠るること、陰部の醜悪を衣にて覆うこと、波羅門の欠点の暴露を憂えてその秘典を他の三種族に秘することなどに用いらるる語であるが、仏陀には慳吝の心なく、真理を体現して欠くる処なく、無上の真理も生類に開陳し、永く性欲を断ち、その説く処は完全にして一点も真理に背く所がない、即ち秘蔵すべき何ものもない。富豪が全財産を一子のために開示するが如く、仏は全人類を一子として所証の真理をことごとく説示して秘する所はない。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

また富豪がその子の学業の上達を念い、半字を教えて、しかも毘伽羅論（言語学）を教えないのは、秘吝のためでないように、仏も浅学の弟子には半字即ち九部の経典を説いて毘伽羅論に比すべき高遠な大乗経典は説かぬ。これは法を慳しみ秘するのでなく受学に堪えないからである。予も先ず半字九部経を説き、次に高遠な大乗の深義を説こう。また天の竜王が大雨を降して種子に芽ぐませ、果実を得させるように、予は大涅槃経を説いて、法を求むの士に法悦を与える。故にその法悦を得ないのは予の咎ではない。」

「世尊の説明によって、私は仏陀に秘密蔵なきことを了解しました。――」

「迦葉よ、言う所の大とは寿命の無量を意味し、涅槃とは瘡疣苦悩なきことを云うのである。毒箭に射られた時、名医の治療によって瘡苦を免れて快癒を得るように、仏陀は正覚を成就すれば大医王として世の苦しみ悩む生類の煩悩の毒箭を抜き、大乗経の甘露の法薬もてこれを快癒せしむる。これが大般涅槃である。故に大般涅槃とは解脱自由の境を指すのである。

迦葉よ、この世界の生類に二種ある。一は有信、一は無信。有信の人は煩悩の瘡疣を治療し癒治し得るから可治と云い、無信の人は一闡提と云い、煩悩の瘡疣を治することを得ないから、不可治と云わる。」

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

小乗の解脱と大乗の解脱

「世尊よ、涅槃は解脱の意味と云われますが、その解脱は物質的のものですか、精神的のものですか。」

「肉体のあるものもあり、また肉体のないのもある。非物質のものは小乗の解脱で、大乗の解脱には物質の存在を許す。故に解脱にも物質と精神の二つがある。唯もろもろの浅学の弟子に非物質と説くのである。

正しきものよ、真の解脱とはあらゆる束縛を脱却することである。真の解脱即ち一切の繋縛を脱すれば、父母の和合によって生ずるが如き生はない。故にまた不生とも云う。また解脱を虚無と云うことがある。一切の差別的存在を否定し尽した虚無が解脱である。解脱は則ち仏陀である。仏陀は差別的偏見を脱離せるものであるから、解脱は安穏とも名づける。真の安穏は清浄の処にある。解脱には一切の妄染（けがれ）なく、従って畏るべき何物もない故に解脱を安穏と云う。仏陀もまたそうである。

また解脱には不定はない。不定とは一闡提と重罪を犯した者との不成仏を云う。仏のみ教えによって心に信仰の芽ぐむとき、または居士となり得るとき一闡提ではなくなり、重犯者もその罪の滅するとき成仏を得る。故に決定的に不成仏と云うことはない。解脱は全生類にあまねく、決定的に漏す一類もな

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

い。一闡提とはあらゆる正善の根本を断滅して、心に毫も善事を思わぬ輩を云う。また解脱は大海の量り得ざる如く、広大にして辺際がない。また解脱を不可執と云う。即ち幻の捕え難きが如く、執着すれば真の解脱ではない。

また解脱は一味平等のもので、二、三異なるものでない。絶対究竟の境は唯一であらねばならぬ。また解脱は絶対唯一の帰依処で、他に依憑を求むる必要がない。国王保護の下にあれば身命財産の安全を得て、他の依恃を要せざるが如く、国王はなお権威の消長あるも、解脱には変化がない。また解脱は絶対清浄のものである。獄に繋がれた者が繋を脱がれ、身を浄めて後、家に還るように、解脱は一切の繋縛、垢穢を離れた絶対清浄のものを云う。また解脱は不空空と名づける。空空は無存在で、これは耆那（ジャイナ）教などの説く解脱である。存在を否定するものに真の解脱はない。故に空空と云う。すなわち真の解脱は不空空である。不空空は解脱であり、真理の体現である。また解脱を不空と云う。水鉾（かめ）の内に水なきときもなおその名をたもち、しかもその鉾は、一物体として存すれば空とも、また内に水なければ不空とも云われないように、解脱もまた物質とも精神とも、また空とも不空とも云うことは出来ぬ。もし空と云えば常、楽、我、浄の四徳はなくなり、もし不空と云えば誰かこの四徳を受くるものがなくてはならぬ。故に空でもなく、不空でもない。強いて云わば空は因果的一切の存在、もろもろの煩悩、一切の苦、一切の相、一切の差別変化のなきこと。また不空は真実、浄化された物質、常、楽、我、浄、不動、不変のあることでなくてはならぬ。鉾は時機が来れば壊れるが、解脱には破壊変化はない。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

解脱を欣求するものは生死煩悩を怖れ、解脱の三方面なる仏、法、僧の三宝を信仰し、これに依憑せねばならぬ。即ち自己の全生活を涅槃体現の道程とせねばならぬ。かくしてそこに安楽の天地は開ける。安楽は即ち解脱である。真の解脱は真理の体現で真理の体現が即ち涅槃である。涅槃は無辺、無辺にして万有にあまねきものは仏性、仏性あるものは必ず成仏する。」

「世尊は安楽を涅槃と云われますが、変化の堆積する身も苦楽を分別する智もないものがどうして楽を受けられましょうか。」

「予の云う安楽とは食い合せをして苦しむものが、腹中のものを吐き出して恢復した気持と同様である。苦しみの原因である差別的の存在を捨離した処に本来の涅槃安楽が現わるる。」

「解脱を不生不滅とすれば、不生不滅の虚空は仏陀の本性、解脱涅槃でありますか。」

「以ての外である。汝の問いは迦陵頻迦（かりょうびんが）の声と烏の声との比較の如く、芥子と宇宙との比較の如く天地霄壌の差がある。元来真の解脱はこの世界に比すべきものはない。予が前に虚空に譬えたのも、理解を助けるために、幾分の相似の点ある処から例示したに過ぎぬ。『容貌の端麗月の如く白象の清鮮雪山の如し』と云えばとて、容貌と月、白象と雪山とを同一と見る愚かものはあるまい。

正しき人よ、予は種々の手段方法に依り、また因縁譬喩に依って解脱の説明をしたが、譬えを事実と同視してはならぬ。解脱には限りなき性能と霊徳とを完うしている。従って解脱の体現者たる仏陀も無景の霊徳霊能を具え給う。かくの如く限りなき性能と霊徳とに満たさるるが故に、大般涅槃と名づけ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

る。」

「世尊よ、私はいま始めて真理体現者の天地の限りなく、寿命の限りなきことを理解することが出来ました。」

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com